

## ◆「遅く」「長く」全国1位

2007年11月7日付奈良新聞に、このような見出しの記事が掲載されました。

「『遅い』のは午後8時7分（男性）『長い』のは4時間14分（女性）で、いずれも全国1位」です。さて、男性の何が遅くて、女性の何が長いのでしょうか？

記事によると、奈良県在住で仕事をもつ男性の帰宅時間の平均は、午後8時7分で全国一遅く、女性が家事、介護・看護、育児、買い物などに費やす家事関連時間は、4時間14分で全国一長いのだそうです（「総務省2006年度社会生活基本調査」による）。

そこからは、「男は仕事、女は家庭」という男女による分業型形態が、他府県に比べて根強いことや、男性の仕事時間が長いことなどがわかります。またこのことは、男女共同参画社会の進展をはばむ大きな要因になっているとも考えられます。

奈良県の合計特殊出生率（※1）は、1.22（全国44位、2006年度）であるのに対し、子育て支援の先進と言われる福井県では、1.50（全国6位、2006年度）となっています。

今回の福井市への訪問レポートに、「男女共同参画と少子化対策を両輪で」とあるように、また、出生率が上昇している諸外国（フランス、スウェーデン等）の例を見ても、男女共同参画が進み、仕事と子育ての両立が可能な環境があるかどうかによって、子どもを産みたいときに、産みたいだけ産めるかどうかは、ずいぶん変わってくる考えられます。

全国データで、とくに奈良県が高いもの、低いものをあげて、奈良の男女共同参画と子育て環境について考えてみます。

## ◆ 男女共同参画に関わる全国データのなかで、とくに奈良の順位が高い項目

項目	数値	順位	調査年
核家族世帯割合 (%)	64.91	1	2005
昼間流出人口比率 (%)	15.42	2	2005
県外就業率 (%)	28.98	1	2005
通勤時間 (男) / (分)	61	4	2001
通勤時間 (女) / (分)	43	2	2001
月別平均実労働時間数 (男) / (時間)	188	6	2006
女性失業率 (%)	7.6	3	2002
15～34歳 女性ニート率 (%)	4.7	2	2005
女性家事関連時間	4.14	1	2006
20～24歳 未婚女性割合 (%)	91.8	3	2005
25～29歳 未婚女性割合 (%)	63.5	3	2005
30～34歳 独身女性親同居率 (%)	80.7	2	2000
高卒後進学率 (%)	56.0	4	2006
0歳男平均余命 (年)	78.3	3	2000
1カ月教育費 (円)	28,556	4	2004
中学校生徒千人あたり 長期欠席生徒 (人)	45.17	2	2005

#### ◆ とくに奈良の順位が低い項目

項目	数値	順位	調査年
合計特殊出生率	1.22	44	2005
保育所数／カ所	195	47	2004
15～64歳 女性労働力率(%)	48.9	47	2000
共働き世帯割合(%)	24.93	39	2005
月別平均実労働時間 数(女)／(時間)	172	38	2006
人口10万人あたり 男性自殺件数(件)	27.7	43	2003

#### ◆ 就業率と子育て環境の整備

男性の労働時間がとくに長く、全国6位となっています。反面、女性は全国38位で、男性とは16時間の差があります。県外就業率が高いために、女性も男性も通勤に多くの時間を費やしています。

核家族世帯が全国1位で、共働きの割合が低いことから、子育てに協力を求められる環境に欠けることが推測できます。

女性の失業率(※2)が男性と比べて際立って高いことから、女性の就業への潜在意欲はあるものの、就労できない状況があるようです。その背景には、「子育て＝母親の仕事」という旧弊な意識や、子育て環境の不整備があることが考えられます。その克服のためには、子育ては社会全体で行うという意識作りや、女性が仕事をしたいと思ったときには、子育てをしながらも働き続けられる、たとえば、三世帯同居に代わる「おじいちゃん、おばあちゃんの家」のような、身近で気兼ねなく地域の力を借りて世代間交流をしながら利用できる場所が、行政によって整備されることが必要です。

#### ◆ ポストの数ほど保育所を

保育所数が全国47位となっており、同じ2004年の奈良県人口が全国29位であることと比べると、人口の割に保育所数が少ないと言えます。労働力を上げることによって、合計特殊出生率をも上げることに成功したスウェーデンでは「ポストの数ほど保育所を」を合言葉に、保育所が整えられました。奈良県においても、「待機児童ゼロ」という目標にとどまらず、実際に利用する者の身になって、保育所が設置されることが大切だと言えます。また、子育てに関して女性への期待がまだまだ大きい奈良で、女性が出産後も仕事を続けるためには、急な病気や残業など、困ったことがあったときに、頼れるところが必要ですが、そこは、男性にとっても利用しやすい場所であるべきです。

#### ◆ 女性たち、夢をあきらめない

教育費に多くを費やし、高卒後の進学率も高くなっているように、教育熱心な県民性がうかがえます。しかし若い女性のニート率が高いことは、学歴の高さにもかかわらず、就業していない女性が多いことを示します。

また、独身女性の親との同居率が高いことは、いわゆる「パラサイトシングル」と呼ばれる人たちの割合が高いと思われます。

奈良県の女性たちが就業しにくいのはなぜでしょうか？

第一に、通勤時間の長さから、県内の就業先が少ないことがうかがえます。県内では、女性の技能や労働力を評価し、積極的に採用しようとする企業の存在をあまり聞きません。通勤に時間のかかる県外で正社員として働き続け、家事や子育ても加わるとなると、女性への負担は心身共にかなり大きいものになります。これらの是正のために、奈良県女性自身が起業したり、NPOなどを立ち上げてい

く積極性も必要となるでしょう。

第二は、冒頭にもあげた「男は仕事、女は家庭」といった性別役割分業の形態および意識です。仕事を続ける条件が厳しいとなると、子どもたちに多くの教育費を費やしてきた親たちが、たとえば大学卒業後の娘の生活を支えることも、可能なのかもしれません。「男の子だったら困るけど、女の子は無理しなくても…」という性別による二重規範は、中学や高校、大学での進路選択の際に、いまだに耳にすることばです。「女の子やのに、勉強がよくできる！」県内の中学校の教員が実際に言ったことです。それらが、女性たちから自分の力を存分に活かして学ぶ機会を奪い、夢をあきらめさせています。そのことが、女性労働力率の低さにもつながっていると言えます。また、男性にとっては、前述の性別による役割分担意識と労働時間の長さによって、自分の意思とは関係なく、長時間働き過ぎてしまったり、つらくて仕事を辞めたくても、なかなか辞められなかったりということがあります。性別による役割分担意識が根強いことは、男性の育児休暇取得がなかなか進まないことにもつながっています。

一方、男性の平均余命が、78.36年で全国3位と高く、自殺率は43位と低くなっています。男性の就業の安定は、自殺率の低さと関係するとも言われ、男性にとっては、生きやすい環境もあるのかもしれません。

#### ◆ まとめにかえて

冒頭にも挙げたように、全国のデータから見ると、奈良県は「男＝仕事」「女＝家事・育児・介護」といった性別による役割分担意識がつよい土地柄であるようです。

また奈良県は、合計特殊出生率が全国平均より低い上に、減少傾向が強く、女性の就業も少ないという点で、東京、千葉、大阪、京

都などの大都市と共通しています。このことから、都市周辺で、女性が働き続けるために必要とされる具体的な子育て環境を整備しつつ、男性が柔軟性をもって、仕事や子育てに参画ができるような、きめ細かな支援が求められています。

それとともに、奈良では「男の子が出来るまで子どもを産み続けなくてはならない」という声も、いまだに残るなか、子どもを産まない人や産めない人が、責められたり、つらい思いをしたりすることのない状況をつくっていくことも必要です。

また、若い世代に対しては、「すべての人にとって働くことは権利である」という労働観を男女共同参画の視点で育み、次世代につなげることが大切だと言えます。

制度が変わり状況が変わることで、性別役割分担意識も少しずつゆるやかになる。それがまた、次の世代の生き方を多様に変えていく。そのために、この奈良でこれからも声を挙げ続けたいと思います。（松村徳子）

（※1）15～49歳までの女性の年齢別出生率を合計したもので、一人の女性が、仮にその年次の年齢別出生率で一生の間に生むとしたときの子ども数に相当する。

（※2）「失業」とは以下の3条件をみたさなければならない。

①仕事をしていない ②仕事があればすぐに就くことができる③仕事を探している。

〈参考資料〉

◇『地図でみる日本の女性』（2007年明石書店）

◇『地図でみる世界の女性』（2005年明石書店）

◇『データで読み解く都道府県ランキング』

（2008年アーカイブ出版）

◇『100の指標からみた奈良県勢』

（奈良県統計課HP）

◇『奈良新聞』